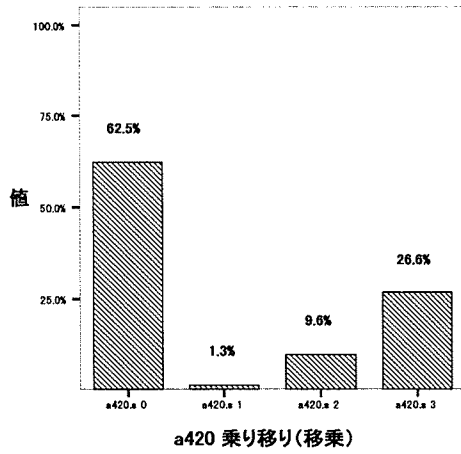


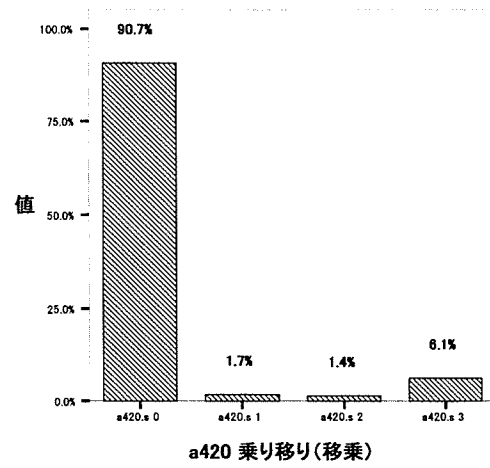
入居形態：入所更生

N=534



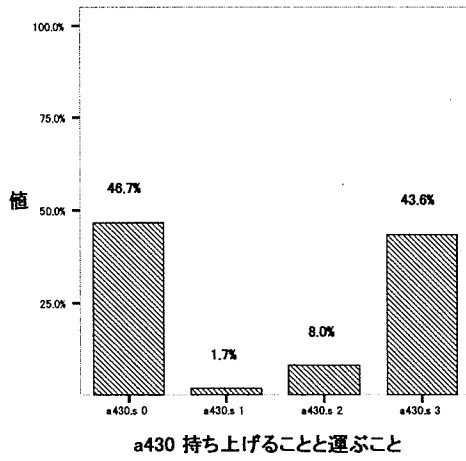
入居形態：グループホーム

N=572



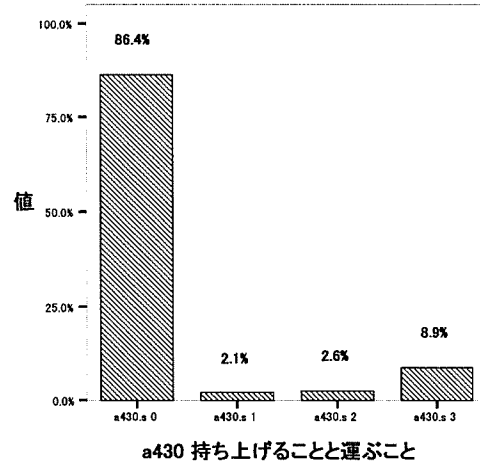
入居形態：入所更生

N=523



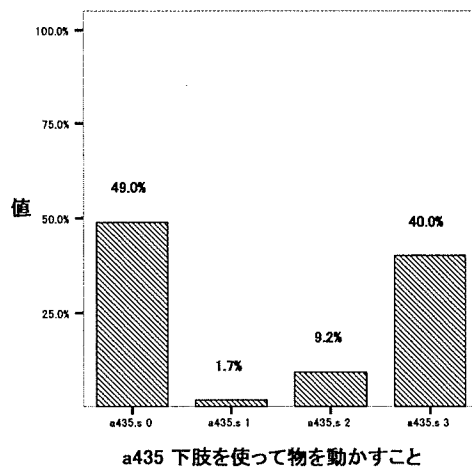
入居形態：グループホーム

N=572



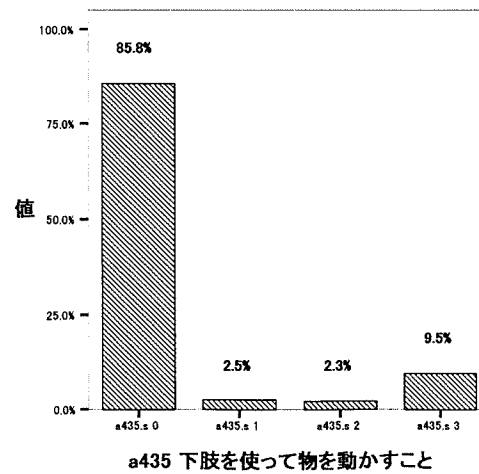
入居形態：入所更生

N=522



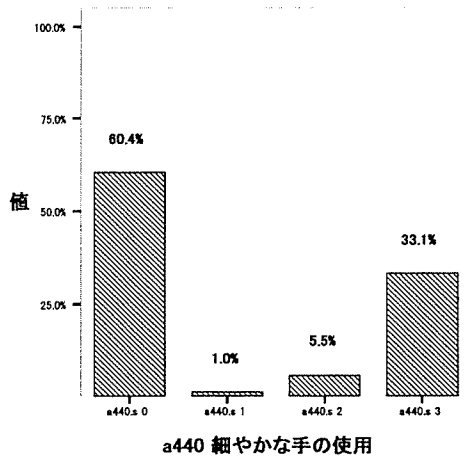
入居形態：グループホーム

N=570



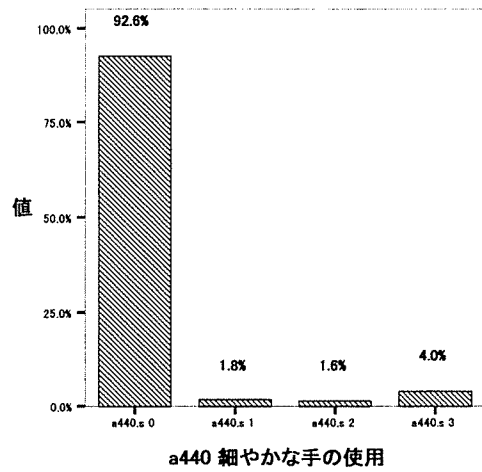
入居形態：入所更生

N=523



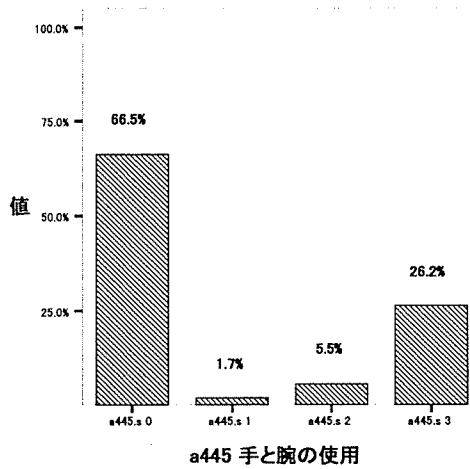
入居形態：グループホーム

N=571



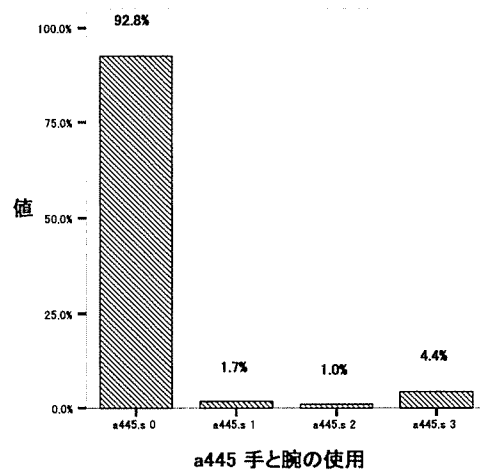
入居形態：入所更生

N=523



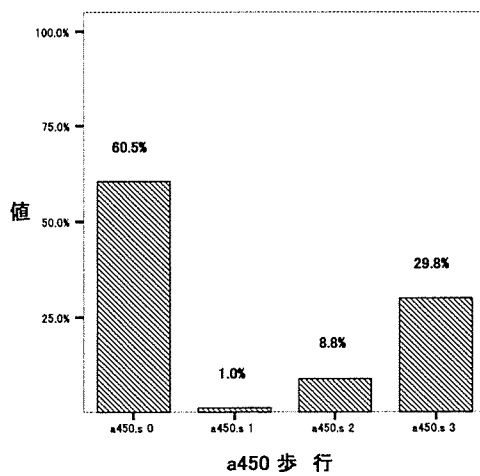
入居形態：グループホーム

N=573



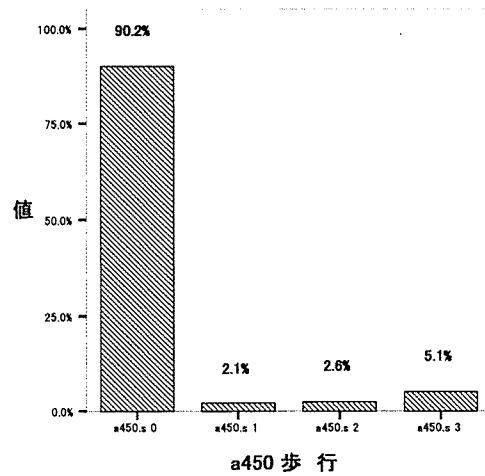
入居形態：入所更生

N=521



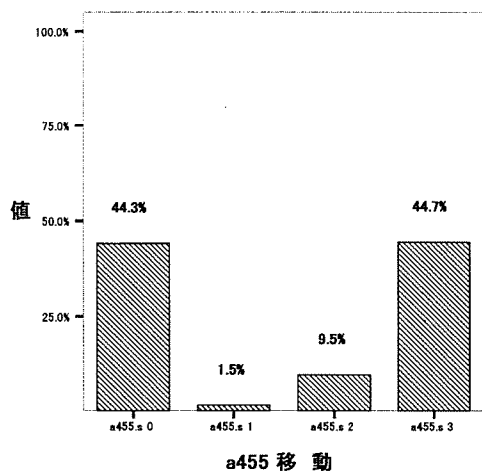
入居形態：グループホーム

N=574



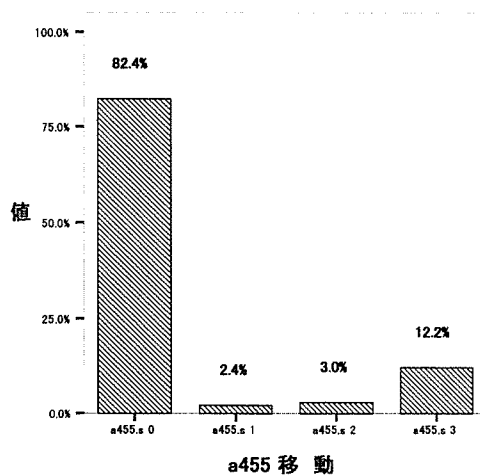
入居形態：入所更生

N=517



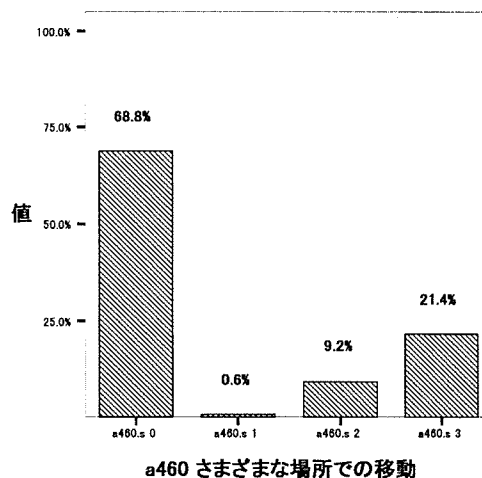
入居形態：グループホーム

N=574



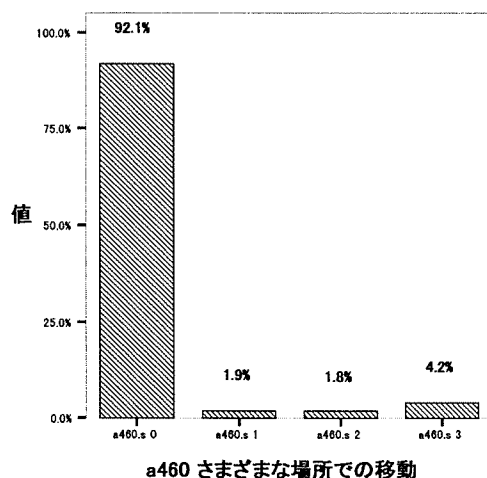
入居形態：入所形態

N=523



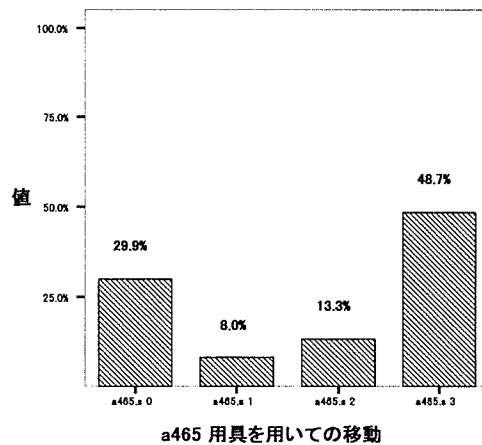
入居形態：グループホーム

N=571



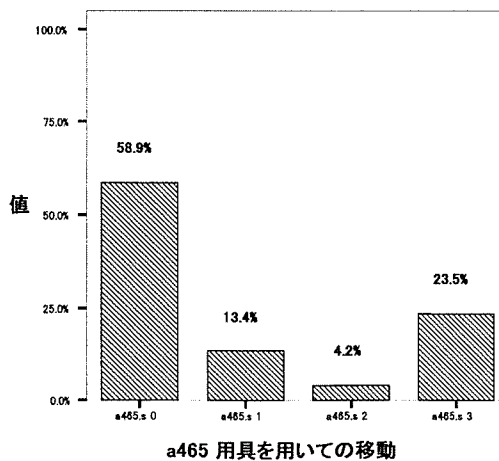
入居形態：入所更生

N=435



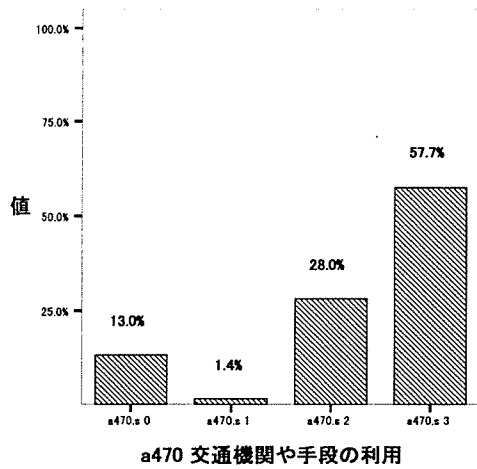
入居形態：グループホーム

N=477



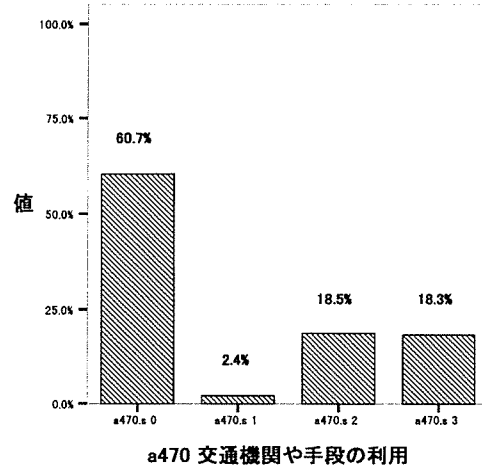
入居形態：入所更生

N=515



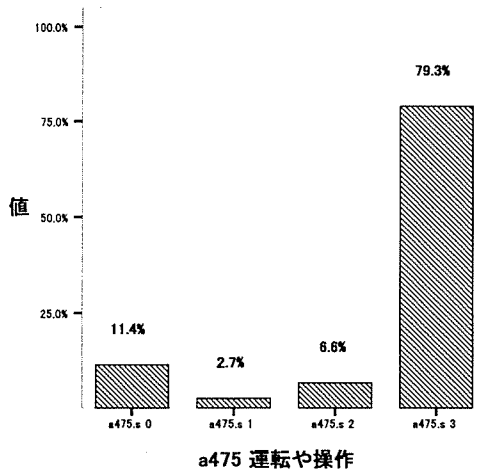
入居形態：グループホーム

N=573



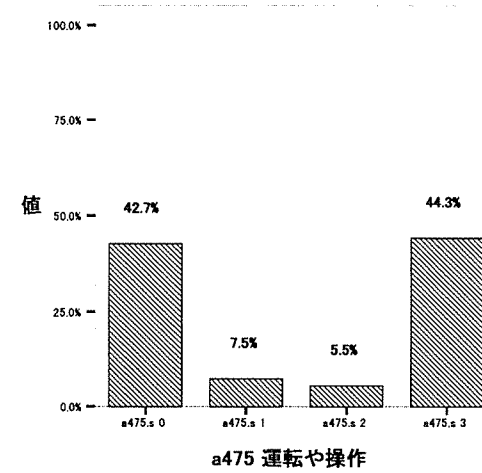
入居形態：入所更生

N=482



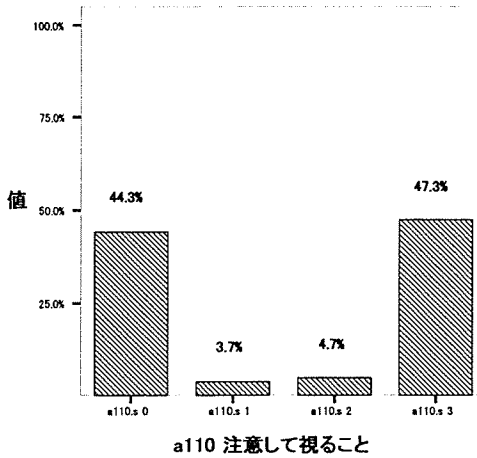
入居形態：グループホーム

N=508



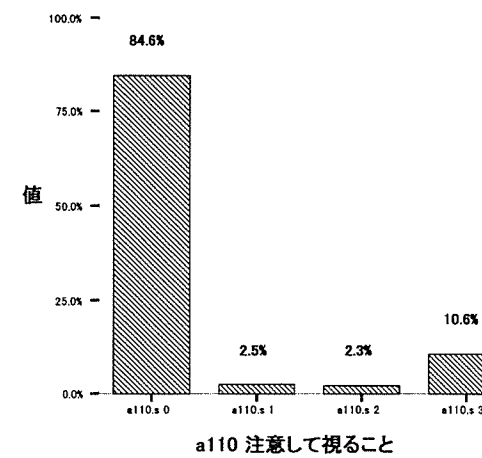
入居形態：入所更生

N=512



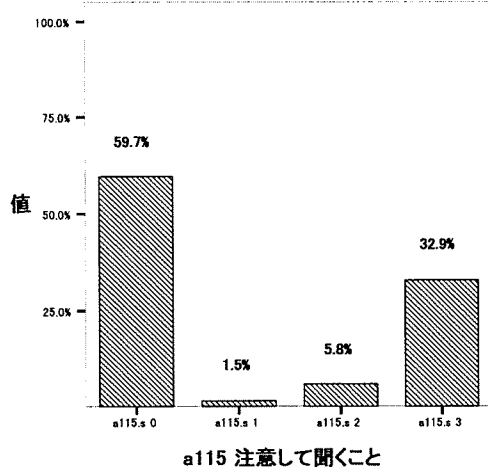
入居形態：グループホーム

N=566



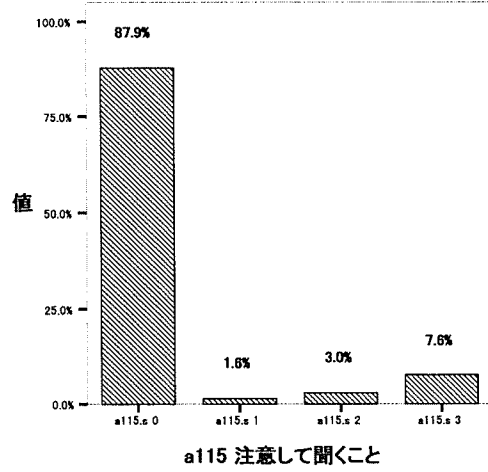
入居形態：入所更生

N=519



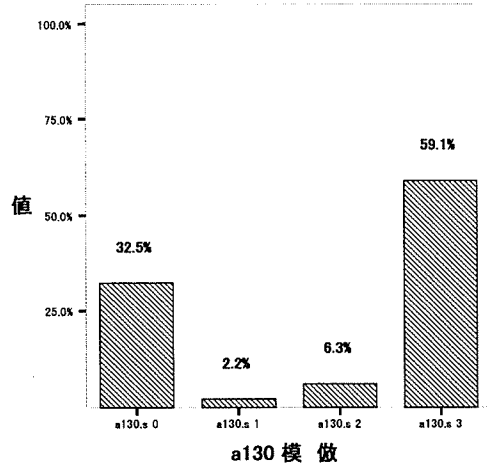
入居形態：グループホーム

N=568



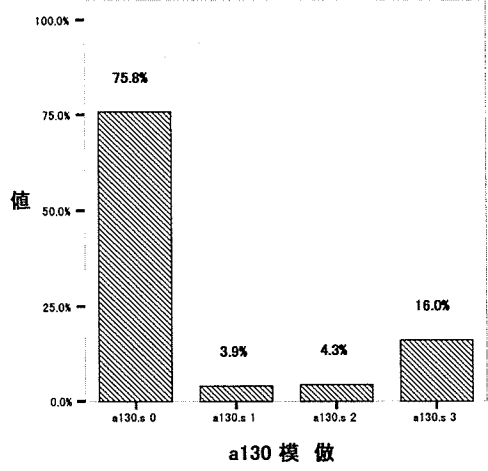
入所形態：入所更生

N=511



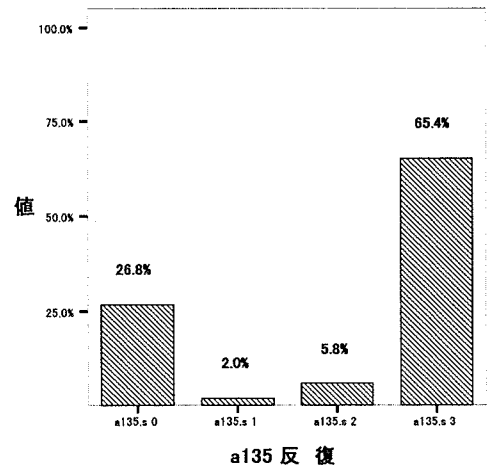
入居形態：グループホーム

N=562



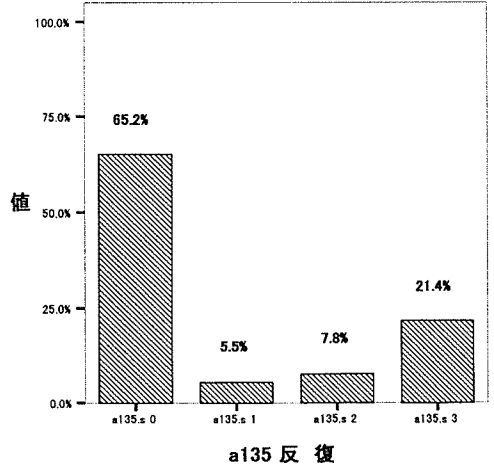
入居形態：入所更生

N=503



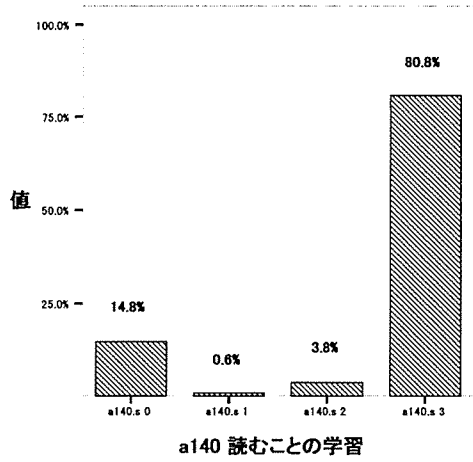
入居形態：グループホーム

N=561



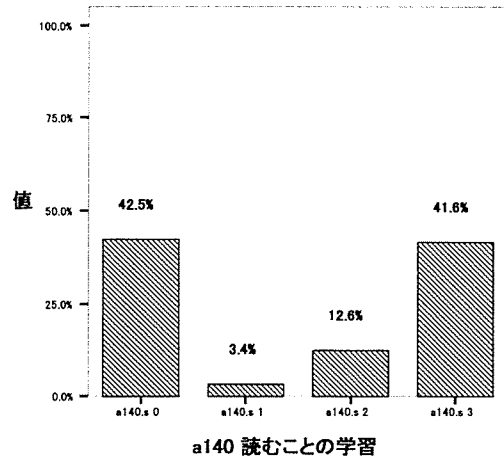
入居形態：入所更生

N=500



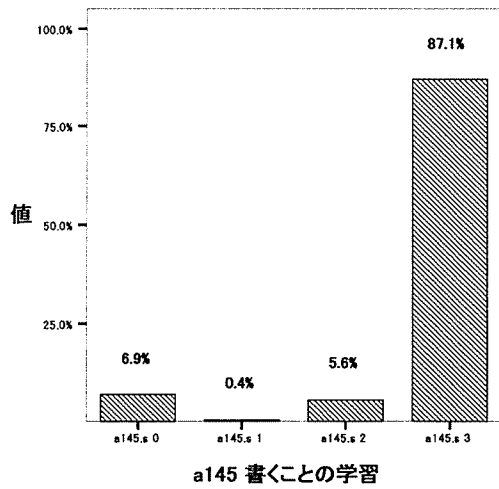
入居形態：グループホーム

N=565



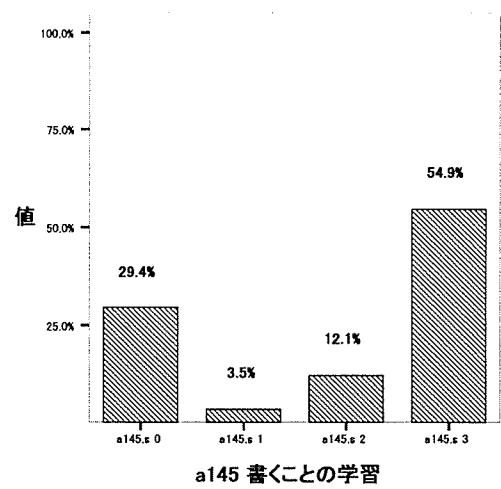
入居形態：入所更生

N=504



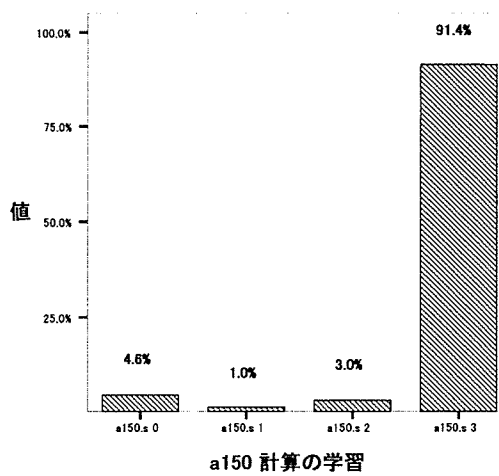
入居形態：グループホーム

N=568



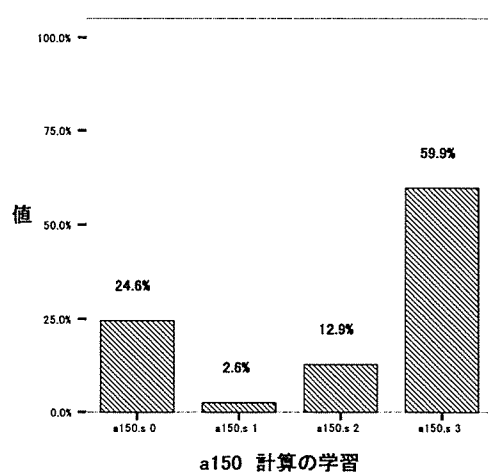
入居形態：入所更生

N=502



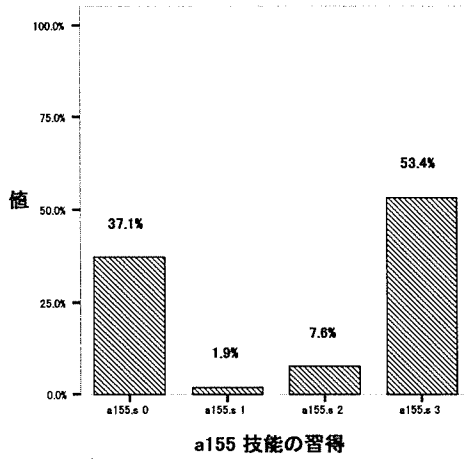
入居形態：グループホーム

N=568



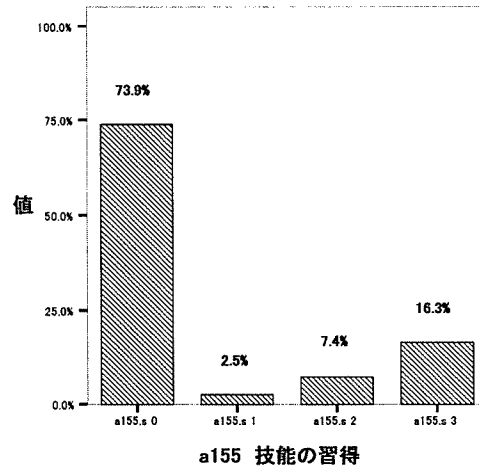
入居形態：入所更生

N=515



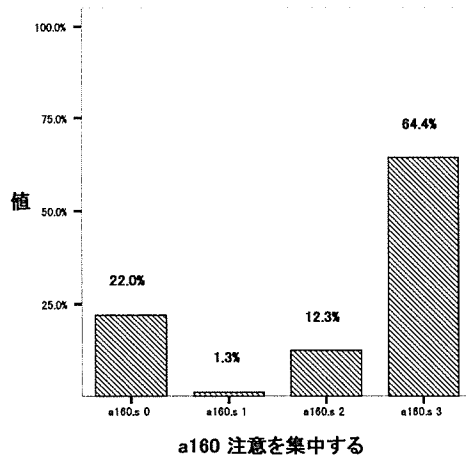
入居形態：グループホーム

N=571



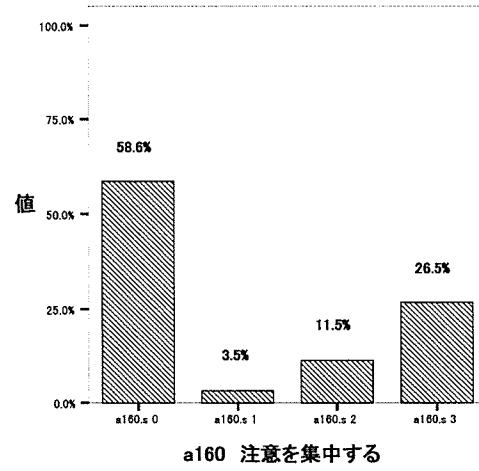
入居形態：入所更生

N=519



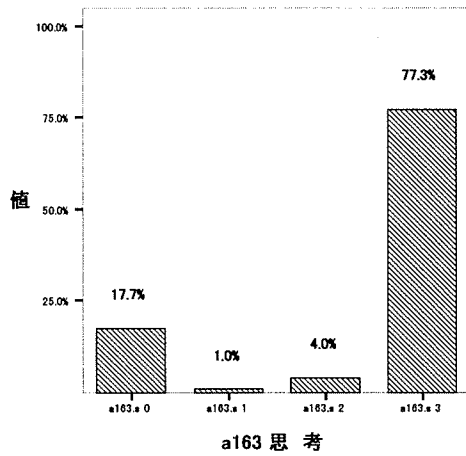
入居形態：グループホーム

N=567



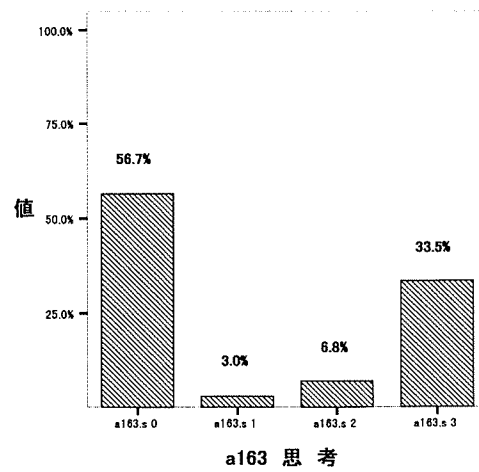
入居形態：入所更生

N=502



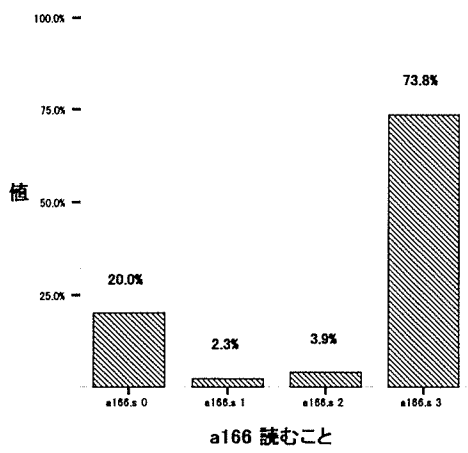
入居形態：グループホーム

N=561



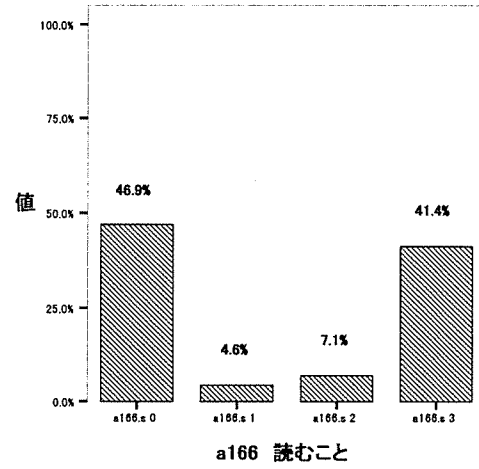
入居形態：入所更生

N=511



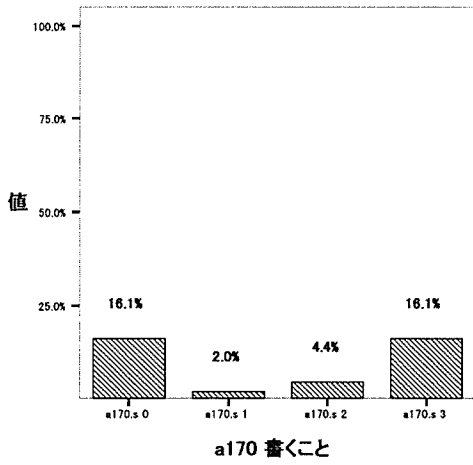
入居形態：グループホーム

N=567



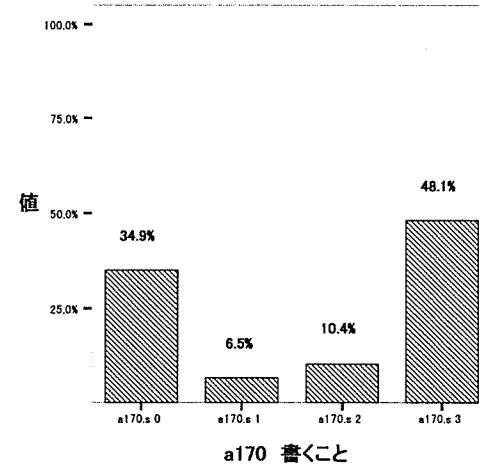
入居形態：入所更生

N=503



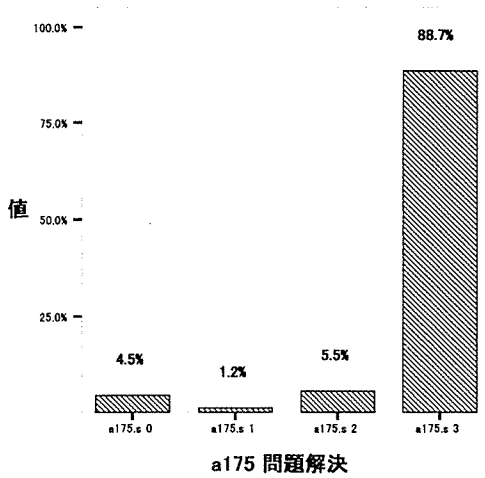
入居形態：グループホーム

N=567



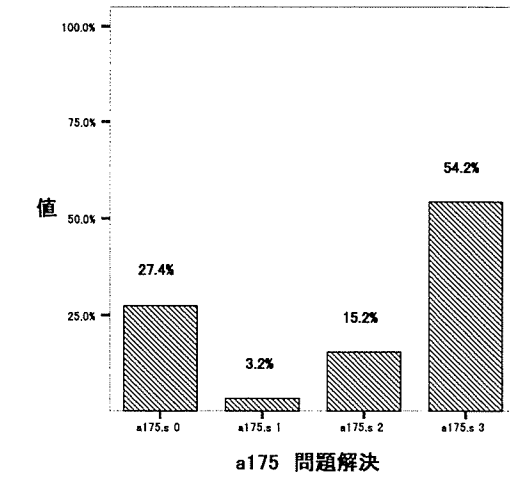
入居形態：入所更生

N=506



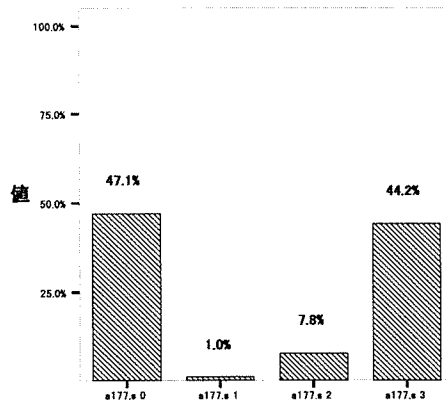
入居形態：グループホーム

N=565



入居形態：入所更生

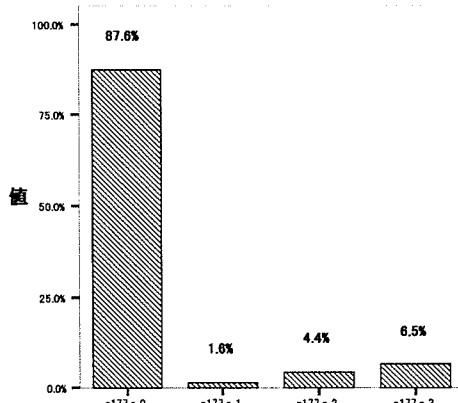
N=514



a177 意志決定

入居形態：グループホーム

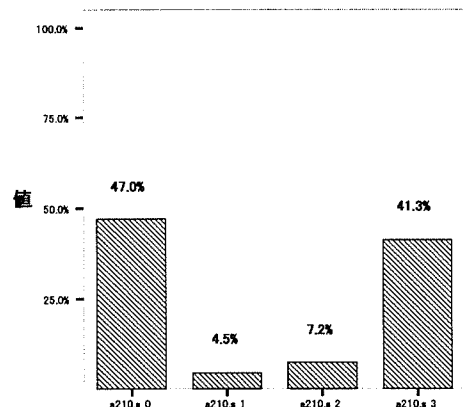
N=571



a177 意志決定

入居形態：入所更生

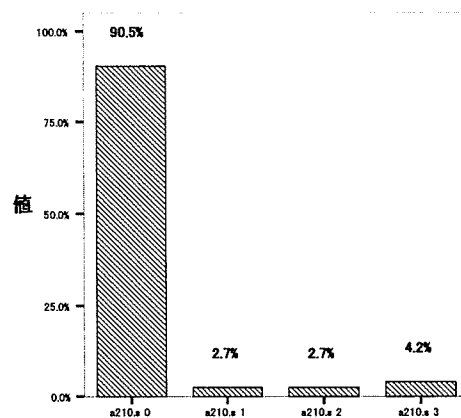
N=513



a210 単一課題の遂行

入居形態：グループホーム

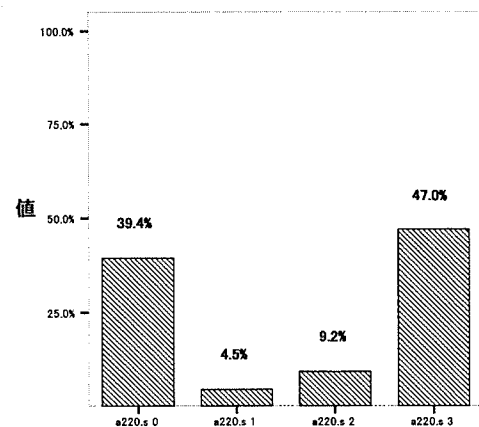
N=566



a210 単一課題の遂行

入居形態：入所更生

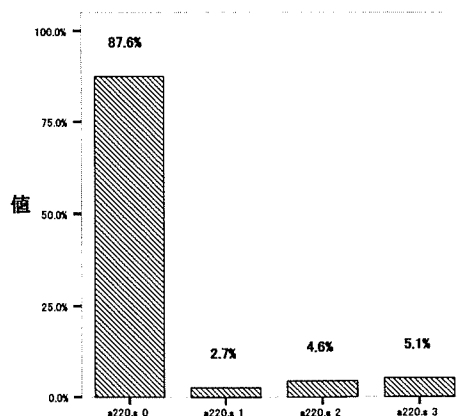
N=513



a220 複数課題の遂行

入居形態：グループホーム

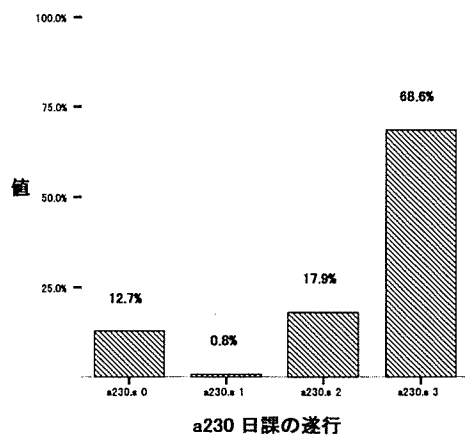
N=565



a220 複数課題の遂行

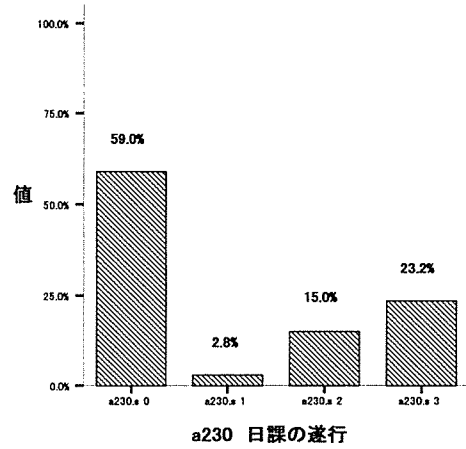
入居形態：入所更生

N=513



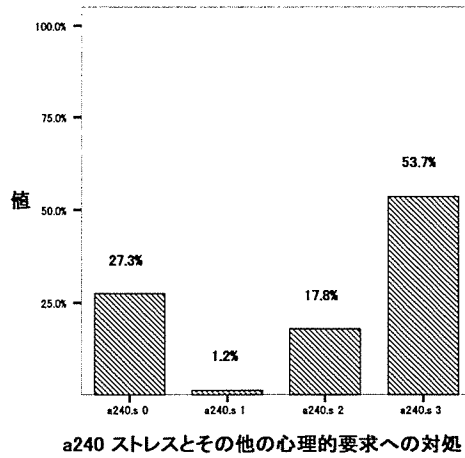
入居形態：グループホーム

N=568



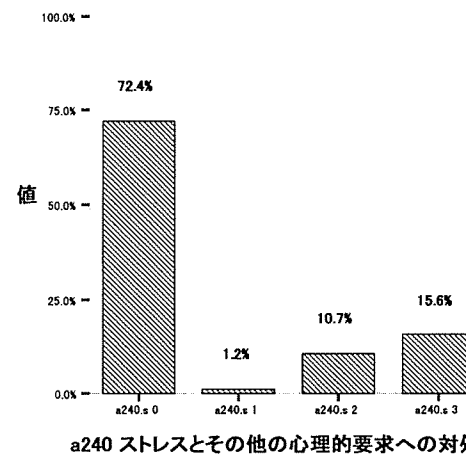
入居形態：入所更生

N=510



入居形態：グループホーム

N=569



(資 料 7)

日本社会福祉学会 第 54 回全国大会 自主企画シポジウム議事録

<自主企画シンポジウム> 議事録

日本社会福祉学会 第54回全国大会

日時：2006.10.8 15:00～17:00

会場：立教大学新座キャンパス

(研究テーマ)

「知的障害のある人の地域移行支援の現状
と課題」

コーディネータ兼シンポジスト

国立のぞみの園 新井 良保

シンポジスト

日本社会事業大学 蒲生 俊宏

国立のぞみの園 原田 将寿

国立のぞみの園 柳田 正明

(日本社会福祉学会 第54回全国大会「報告要旨集」参照 p484-485)

<議事録>

まず、はじめにシンポジストの紹介があり、続いて、本シンポジウムの進め方について話があった。まず、企画の趣旨・研究目的からはじまり、次に、各シンポジストからの、それぞれの研究テーマに基づく発表・報告を行い、その後、参加された皆さんとの質疑応答・ディスカッションの順に進められた。

(企画の趣旨・研究目的) (新井)

・研究テーマの「知的障害のある人の地域移行支援の現状と課題」について、各シンポジストからの報告・提示、そして、それらの検討を通して、本研究テーマの“地域移行支援”の研究に関する議論を深めていきたい。また積み上げていきたい。というのが本企画の趣旨である。

各シンポジストの研究の視点・方法は次の通りである。

①知的障害のある人の地域移行支援の研究動向 (柳田)

・地域移行・脱施設をキーワードにした研究のレビューを行う。そこから、いくつかの課題を概観し、今回検討する課題に絞り込む。本シンポジウムの論点についても、整理する。

②知的障害のある人の地域移行支援の現状と課題 (1) -国際生活機能分類 (ICF) を活用してのアンケート調査から- (新井)

・国際生活機能分類 (ICF) を活用したアンケート調査を実施した。そこから地域移行支援に関連する研究の方法と結果について提示する

③知的障害のある人の地域移行支援の現状と課題(2)-本人の満足感の把握を通して- (原田)

・地域移行支援において課題となる、利用者本人の意志や感情を把握することを目的とした研究の方法と結果を提示。

また、N園の利用者の地域移行の現状についての報告。

④知的障害のある人の地域移行支援の現状と課題 (3) -都外施設の状況から- (蒲生)

・実践事例として、一つの地域移行支援システムを紹介。そこに横たわる課題として、都外施設を史的な観点から検討。

これらの各シンポジストの研究をもって、知的障害のある人の地域移行支援の研究に資することに意義を求め、本シンポジウムを企画した。

(知的障害のある人の地域移行支援の現状と課題) -文献レビューから- (柳田)

文献レビューとしては、脱施設化、施設解体、地域生活移行、地域移行、施設閉鎖、これらをキーワードにした関連文献リストを作成した。日本に限って紹介した。リストをつけた意味は、何をもって話しているのか、と言われたときに、リストにある内容をもって話している、と理解していただきたい。

定義については、論じられているものはあるが、定説にはなっていないので今回は省略した。これに加えて地域生活支援、地域生活自体を基盤としたものを含めると、かなりの量になってしまうので、地域移行に焦点を絞りたいということで、リストからは、はずした。

次に、関連文献年次別及び累積の発刊数であるが、本シンポジウムのキーワードに関連する脱施設化などについて明確にでているものをカウントした。これを見ると、比較的新しいテーマであることが理解できる。脱施設化は、2002年から急に伸びている。

海外事情を扱った関連文献及び発刊数であるが、国別に集計し直したものでは、スウェーデンが多い。外国の紹介自体が多かったことが伺える。

今回のレビューでは、シーレンバーガー等、海外の著名な研究者の詳細についてはふれない。テーマ、キーワードに出ていなくても内容で触れているものは、次のものを加味した。伊藤淑子著「社会福祉職発達史研究」、仲村優一著「社会福祉教育・専門職論」そしてサポート研「解体新書」である。

以上の文献レビューから、

・脱施設化、施設解体のキーワードが先行

- ・その初期の内容は海外事情の紹介が中心。
- ・研究テーマとしての蓄積は途上段階にあるのでは
- ・国際比較では条件の違い（税制、財源、文化など）の多さによって、入所から地域（グループホーム）の移行結果のみの比較では意味はどうか。
- ・2001年から地域移行支援、地域移行のキーワードに関連した文献が急に増えているが、支援費制度（2003年）の影響か、また、宮城県「施設解体」（2002年）などの影響か。

本シンポジウムで焦点をあてる課題については、まず脱施設化の評価については、その重要性が述べられている文献としては、角田慰子「知的障害者の脱施設化政策をめぐる評価視点の検討ー英米の評価研究の比較を通してー」と、鈴木良「知的障害者入所施設 B 地域移行プロセスにおける自己決定に影響を与える環境要因についての一考察」がある。本人からの直接の評価をえることの重要性と困難性が述べられている。

この点については、この後の「利用者の満足感の把握を通して」の課題につながる内容である。

次に国際生活機能分類（ICF）関連の研究については、2001年にWHOで開発されたものであり、量的調査研究、統計的な分析研究の視点として使用されている。この活用に関しては、特殊教育研究所による先行研究がある。また、国の方でもICFの活用について検討委員会が立ち上がっている。本シンポジウムで紹介する報告もひとつの実態の評価である。

また、歴史的な視点もはずせない。都外施設の状況から学び取るものがある。そこ

に横たわる課題について、史的な観点から検討した内容についてこの後、報告する。

N園には、「古代の心身障害者問題」という文献があり、どういう形で施設ができあがったのか。古代の心身障害研究に関するものもある。

よって、本シンポジウムの課題は次の通りである。

- ・利用者の満足感把握の方法
- ・ICFの活用（実態把握の試み）
- ・地域移行支援の現状と課題（N園、都外施設）

（知的障害のある人の地域移行支援の現状と課題(2)）－国際生活機能分類（ICF）を活用してのアンケート調査から－（新井）

本研究は、厚生労働科学研究費補助金、障害保健福祉総合研究事業の「知的障害者の地域移行を困難にする二次的障害とその対策に関する研究」（主任研究者…遠藤浩）の三年間にわたる研究の三年次に関する中間報告の一部である。ICFを活用してのアンケート調査からの内容を中心とした報告である。

本研究の目的は、知的障害者の地域移行を推進するにあたって、二次的障害を持つ知的障害者の実態を明らかにし、地域移行対策としての日常生活に関する具体的支援内容や方法及びその支援体制について提言することである。

これは、二次的障害の実態についてのグラフである。入所更生の方が、グループホームより二次的障害を持っている方が多いことが理解できる。

二次的障害の定義については、知的障害者の方が、知的障害以外の二次的に起こる障

害・疾病のことである。ICD-10（国際疾病分類）に基づいて分類した。

N園（のぞみの園）では消化器系疾患の方が多く49%である。ほぼ半数の方がそうである。40～50歳代の方がピークである。N園における二次的障害の現状の一端が示された。ちなみにN園の平均年齢は、現時点で56歳である。

ICFアンケートの入居利用先（施設かグループホーム）とICFの項目をクロスさせたグラフは、「基本的な経済的取引」、「自分の身体を洗う」の項目で、グループホームの方はどちらも44%の方が、能力がありまた可能であることが示されている。それに対してN園ではどちらも、1～2%である。このことからN園における利用者の重度の実態が理解できる。

次に、ICF（国際生活機能分類）を活用しての本調査に関して検討・考察した内容について報告していきたい。具体的には、ICF活用上の項目及び評価点の基準の設定、回答方法、また日常支援に関する項目（ICF項目）についてである。

本調査についての調査対象は、グループホームを有する社会福祉法人を抽出し、且つ当該法人がニュースレターを送付している法人600ヶ所、及びそれ以外の任意に抽出したグループホーム200ヶ所。抽出総計800ヶ所である。さらに、N園利用者65名と、更に任意に抽出した入所更生施設600件を追加した。

回収率はグループホームが配布数800部、回収数500部で62.5%。これに事前調査102件を加えた602件。入所更生施設は配布数438部、回収数334部で55.7%。N園は事前調査135件に追加調査65件を加え200件

とした。

事前調査で設定した ICF 233 項目は、変更せず、選択肢の設定を先行研究を踏まえ「有無」の二値とした。

また、二次的障害に関わる基本情報に関して、16 項目の二次的障害の有無と、さらに各障害ごとに疾病名を詳細に調査 (98 項目) した。

本調査で使用した二次的障害及び ICF 評価表の一部を紹介し、左側が二次的障害に関する表で右側が ICF の「活動」に関する表であること、「活動」は評価点が四つあること、すなわち現在の実行状況と能力であることを示した。

次に、研究結果及び考察である、本調査で使用した233項目とICFチェックリスト (日本語訳版) との比較を行った。ICFチェックリストとの比較では、一致する項目は123項目、独自に設定したのは110項目である。したがって、計233項目で調査を実施した。

統計分析の目的は二次的障害の種類やグループによって、対象者の現在の入所先に関連する日常支援 (ICF 項目) を明らかにすることである。

これにより、入所施設で生活する知的障害者が地域移行を実現するために求められる日常支援を検討する。

この分析については統計の専門家の協力を得て行った。

(日本社会事業大学・・・後藤教授・大島研究員)

分析対象は、施設利用者534名、グループホーム入居者602名の計1136名である。ただし各調査項目の欠損値が50以上の変数は削除したので、結果的には622名を分析対象と

した。

分析1として、二次的障害によって分析対象者のグルーピングを行うために、5つのパターン (大項目、小項目など) を用いた。

目的変数を「現在の入居先」、説明変数を「二次的障害」としたパーティション分析を行った。(SAS社のJMP5.0使用)

グループ1からグループ5までの5グループに分類された。

パターンA (過去および現在の疾患・大項目) の分析結果である。

グループ1が288名 (入所97, グループホーム191) と最も多く、次にグループ4の133名、グループ3の116名、グループ5の62名、グループ2の26名の順であった。このグルーピングでは、神経系疾患・精神科疾患・感染症等の有無が入居先に最も関連のある項目であることが示された。パターンB (過去および現在の疾患・小項目) の分析結果である。

グループ1からグループ5までの5グループに分類された。グループ1が404名と半数を超え、次にグループ2の109名、グループ5の47名、グループ4の45名、グループ3の18名の順であった。

このグルーピングでは、行動障害・脳性まひ・てんかん等の有無が入居先に最も関連のある項目であることが示された。

次に、パターンC (心身機能) の分析結果である。

グループ1からグループ5までの5グループに分類された。グループ1が251名と最も多く、次にグループ5の173名、グループ2の87名、グループ4の70名、グループ3の41名の順であった。このグルーピングでは、精神機能b147「精神運動機能」の有無が入

居先に最も有意な項目であることが示された。また、b167、176も有意な項目であったことから精神機能の程度が入居先に影響を及ぼしていることが示唆された。

次に、分析2である。グループ別にみた現在の入居先に関連するICF項目の明確化の分析である。

分析1から得られた対象者のグループ別に、現在の入所先に関連するICF項目を明らかにするために、目的変数を「現在の入居先」、説明変数を「活動71項目」「参加26項目」「環境因子58項目」としたパーテーション分析を行った。

パターンAの結果である。グループ別の入居先に関連するICF項目については次の通りである。

グループ1(288名)・・・「参加p860:基本的な経済取り引き」、「活動a240.2:ストレスとその他の心理的要求への対処」

グループ2(26名)・・・「活動a640.2:調理以外の家事」。施設入所の対象者はみられない。

グループ3(116名)・・・「活動a510.2:身体を洗う」「環境因子e310:家族」

グループ4(130名)・・・「活動a860:基本的な経済取り引き」「活動a435.2:下肢を使って物を動かすこと」

グループ5(62名)・・・「参加p630:調理」などのICF項目が特定された。

パターンCのグループ別の入居先に関連するICF項目については次の通りである。

グループ1(251名)・・・「参加p860:基本的な経済取り引き」、「参加p910:コミュニティライフ」

グループ2(87名)・・・「活動a560.2:飲む」

グループ3(41名)・・・「活動a640:調理以外

の家事」

グループ4(70名)・・・「活動a220.2:複数課題の遂行」

グループ5(173名)・・・「活動a220.2:複数課題の遂行」「参加:p620:物品とサービスの入手」などのICFの項目が特定された。

以上のICFの項目については、日常生活支援との関連で、今後、検討・考察していきたい。

これは、ICF「活動」の評価点について(実行状況と本人の能力)確認したい。実行状況(支援を含む)と本人の能力との関係である。回答欄が四択である。

0・・・している — できる

1・・・していない — できる <制約>

2・・・している — できない<支援>

3・・・していない — できない

入所(A)、グループホーム(B)として入所更生施設からグループホームを引いたA-Bを支援・制約の量の差として、とらえた。

この表は、その支援の量の差をランキングにしたものである。「セルフケア」に関する項目が上位にランクされている。

これは、支援の量のランキングで最も上位であった「自分の身体を洗う」を四択に表したグラフである

これは、制約の量の差で、上位であった「複数課題の遂行」の実態を表したグラフである。

まとめと課題である。

<地域移行支援の現状について>

- グループホームと比較して、N園の利用者の重度・高齢化の実態から、多くの支援を要することが示唆される。
- 加齢に応じての二次的障害の増加が確

認されており、その対応策が必要であることが伺える。

以上の視点を踏まえ、分析・検討し、報告書にまとめていきたい。

(知的障害のあるひとの地域移行支援の現状と課題)

～本人の満足度感の把握を通して～(原田)

平成15年9月30日特殊法人「心身障害者福祉協会 国立コロニーのぞみの園」を解散し、平成15年10月1日に独立行政法人「国立重度知的障害者総合施設のぞみの園」が設立された。

目的(果たすべき役割)としては次のような内容である。

1. 重度の知的障害者に対する自立のための先導的かつ総合的な支援の提供
2. 知的障害者の自立と社会参加活動への参加を促進するための効果的な支援の方法に関する調査、研究及び情報の提供
3. 知的障害者の支援業務に従事する者の要請及び研修
4. 知的障害者援護施設の目的に応じた援助及び助言

さらに、次の内容である。

1. 平成19年度末までに、3割～4割の利用者縮減
2. 重度知的障害者の地域への移行に向けた施設内処遇と地域生活支援体制の構築のあり方に関する調査及び研究 ということである。

平成20年の3月までに、3～4割の利用者の縮減と施設内処遇ならびに地域生活支援体制の構築が厚生労働省から示されている。

平成8年から「聖域なき改革」である。特殊法人は多種多様にわたっている。日本道路公団も特殊法人であった。廃止か民営かの選択である。心身障害者福祉協会も廃止か民営かせまられた。

独立行政法人の通則法では、事業の効率の運営に関するトップは総務省である。各省庁の管轄としてはのぞみの園は厚生労働省である。

3～4割の縮減であるが、当時は490名の利用者である。地域移行250名は大変である。ということで3～4割になった。

のぞみの園が地域移行をはじめの前後、宮城の船形、長野県の西駒郷が、かなりの成功をおさめていた。のぞみの園の地域移行は進んではいないが、実際に携わっている者として、地域移行の現状について報告した。

のぞみの園の利用者の現状であるが、現在436名の入所者である。そのうち、30年以上の在籍者が79.9%である。10年未満はいらっしゃらない。50から59歳が56.8%である。最高齢が84歳。IQ測定不能が35%高年齢化である。介護度が高い。もうひとつ463名の出身地である。44の都道府県にまたがっている。東京(94名)、千葉(42名)、埼玉(41名)など関東が多い。蒲生先生の都外施設の問題がある。

地域移行を家族の皆さんにお話しした。施設を移ることを考えたことがありますか。考えたことがないが87%であった。ふるさとへ帰るということは、どんなお気持ちですか。率直なご意見をいただいた。自由記載に書かれていた。保護者アンケートを実施した。回収率は82.7%で、高い回収率であった。その中で、保護者は地域移行は考

えたことがない 87%。地域移行は総論賛成・各論反対の意見が多かった。

「くのぞみの園の地域移行の基本方針」は 5つある。

- ①利用者の気持ちを大切に
- ②保護者の意向を尊重
- ③保護者に経済的負担をかけない
- ④受け入れ先と連携を図る
- ⑤必要に応じて再入所

移行先での生活が困難な場合に再入所を認めるということである。

利用者本人の気持ちを大事にしたい。利用者がどういう考えで、今の暮らしに対して、どう思われているのか。満足感の把握を行った。

のぞみの園の地域移行へのプロセスは 7 段階ある。まず最初に、利用者本人、家族への説明である。いくら利用者本人から、地元へ帰りたと言っても家族の同意がなければ、いかななものか。家族の同意がないと地域移行が進まない。

地域移行を進めるにあたって、30 年近く、のぞみの園に住んでいて、いきなり地域移行といっても無理なので、あいだに、地域生活に近い生活として「生活体験ホーム」をつくった。

高齢化された親御さんに説明するのは困難である。ご兄弟に対しても同様である。

のぞみの園の利用者の障害程度、年齢も高齢化、のぞみの園での生活から、地元の施設、グループホームに移るということは無理がある。そこで「生活体験ホーム」ということで、地域生活に近づけたような支援を体験してもらおうということを実施している。463 名全員はむずかしい。少しずつ進めている。地域移行にもパターンがあ

る。生活体験からケアホーム・グループホーム、また、いったんは地元の入所施設に入ってから、グループホームへと、いろいろなパターンがある。その人にはどういう支援をしたらよいのか。一人一人に応じた地域移行を進めている。

これまでの地域移行者であるが、17 名の方が地元、入所施設・グループホームに移行している。このような状況である。移行率は 3.5% である。中期目標には 3~4 割と書かれているが、1/10 にもみたくない。地域移行は進んでいない。と評価せざるをえない。いずれにしても本人の気持ちを大事にして進めたい。44 都県にまたがっている現状で、基盤整備については市町村にお願いする形になっている。群馬県出身者の利用者は法人独自に事業展開をして、地域で暮らせるように、来年 4 月にケアホームを設立する方向で進めている。

地域移行の流れとして、「生活体験ホーム」の事業を進めていきたい。寮生活から離れて、より地域の生活に近づいた生活である。職員宿舎の空き部屋等を使用し、現在 35 名の方が 3K を 2 名で使用している。個室、送迎バス、日中活動、園外の請負作業、支援体制、朝夕の食事・お風呂、緊急な対応、職員の配置などの対応である。

ここで本人の満足感の把握、一生活体験ホームを通して、について報告したい。

地域生活体験ホームに 3 年以上、生活されている 9 名の方を対象にグループインタビュー方式で行った。

今の暮らし（生活体験ホーム）、園の暮らし、地域生活、将来に対して、など相互に話し合える形で、利用者の皆さんから聞き取った。

寮生活での、いい思い出としては、「友達がいる」、「旅行が楽しかった」など。否定的な意見としては、「さわがしい」、「部屋がせまい」、「他の利用者のしかられるのが、いやだ」など、以前の暮らしについては以上のような意見であった。

今の暮らし（生活体験ホーム）についての意見。「静かである」、「こずかい」、「ここで暮らしていけば、ふるさとへ帰れる」、など前向きな意見が多い。否定的な意見もある。「移行すると、寂しくなる」、「友達がいなくなる」、「移行についてわからない」などである。

インタビューは全体として、5回実施し、カテゴリー別に12項目にまとめた。〈寮の暮らし〉〈今の暮らし（生活体験ホーム）〉〈将来の暮らし〉などである。

寮での生活は、すべて悪いというわけではない。今の暮らしは、どうか。窮屈さがない。喜び・楽しさがある。生活体験ホームの方が外に出る機会が多い。など、地域生活に近づく支援に対して肯定的な意見が多い。

将来に向けては、未体験があるので、わからない。など、全体的に意見が少なかった。

グループインタビューの結果も踏まえ、生活体験ホーム事業を通じて、地域生活につなげていければと考えている。

グループホームに移行した事例を報告したい。宿泊体験を1泊、2泊、1週間など、延べ20日間の宿泊体験を実施した。そのことを通して、本人、まわりの人の人間関係作りをしながら、移行していった。463名のうち、現在32名の方が生活体験ホームで暮らしている。この事業の意義とま

とめについて述べて、まとめとしたい。つぎの7項目である。

- ①自己決定・自己判断力の養成
- ②不安感の軽減
- ③達成することの満足感
- ④社会的スキルの向上
- ⑤活動のひろがり
- ⑥家族に対して安心感の提供
- ⑦円滑な移行

本人の気持ちも含めて、本人のペースに合わせて移行を進めていく。納得した形で、時間をかけて行っていく。数字にはあられていないが、本人の気持ちを大切に、ていねいにやっているつもりである。

（知的障害者のある人の地域移行支援の現状と課題）－都外施設の状況から－（蒲生）

都外施設の問題について報告したい。都外施設は、東北から岐阜県にある状況である。時代背景としては、のぞみの園と同じである。のぞみの園の課題を考える上で、1つの問題を提起している。

データーを集めて、東京都の問題として、議論される機会が少なくなっているように思える。このデーターは、2003年の大学のゼミでの学生の卒論のものである。

重度知的障害者に関する新聞記事である。脱施設ができるのか。というシリーズが続かない。この記事で終わっている。脱施設の現状である。

東京都の現状であるが、都外施設に関する知的障害者入所更生施設が41ヶ所。そのうち、青森県のK園に行つて学生は、まとめている。都民のための施設である。2名の事例が報告されている。その一人は、